

# 主日の説教 ◇ C 年 ◇ 担当 佐々木 博 神父

## 年間第 2 主日・C 年 (16.1.17)

### 「しるしを見て信じた」

#### 最初のしるし

今日の福音によって、わたしたちは、幸いにもヨハネ福音書が伝える最初のしるしを体験することができるのであります。

ちなみに、ヨハネ福音書は、冒頭の序文つまり 1 章 1 節から 18 節までの

「みことばの賛歌」に始まり、第一部の「しるしの書」は、1 章 19 節から 12 章 20 節、そして、第二部として「栄光の書」が、13 章の 1 節から 20 章の 31 節となっており、エピローグは 21 章 1 節から 25 節で終わっております。

したがって、今日の箇所は、第一部「しるしの書」で最初に報告されているしるしの奇跡にほかなりません。

この「しるし」ですが、特にヨハネ福音書で使われている言葉であり、他で「奇跡」と云われることに共通する内容ですが、神がどのようなお方なのか、まさに目に見える形で示される出来事を「しるし」と云っているのではないのでしょうか。

では、早速今日の箇所を、文脈にそって、すこしていねいに読み返して見ましょう。

まず、本文は「三日目に」というヨハネが好んで使う言い回しで始っておりますが、「聖書と典礼」にあるように「そのとき」と言い換えることができるのであります。ただ、ここで注意すべきは、「イエスの母がそこにいた」と、まず、マリアが登場するのですが、マリアという名で呼ばれるのではなく、「イエスの母」しかも「婦人よ」と呼ばれます。実は、十字架上からもマリアに向かって同じように、イエスは「婦人よ」と呼び掛けました。(ヨハネ 19.26 参照) 恐らく、そのときイエスは、マリアを肉親の母親としてではなく、あくまでキリスト共同体の象徴として見ていたのかも知れません。

さらに、このしるしが行われたのが、ガリラヤのカナということで、特にイエスがユダヤとは対照的にまさに全面的に受け入れられた土地であることを強調していると言えましょう。

とにかく、当時のオリエント社会での結婚式は、なんと通常七日間も続くであります。そ

の間、ぶどう酒は、おとめたちが踊って婚礼を祝うためにも、また、若者や老人たちが楽しむためにもなくてはならない必需品でした。

その席上、なぜ母マリアが、ぶどう酒のことを気にかけたのか、ヨハネは何も説明していません。

そこで、唐突にマリアは、なぜか、イエスに向かって「ぶどう酒がなくなりました」と報告したというのです。ですから、イエスはとっさに「婦人よ、わたしとどんなかかわりがあるのです。わたしの時はまだ来ていません。』と、けんもほろろに断りました。それは、イエスがご自分の力が現れるのは、御父が決める「時」なので、「わたしの時はまだきていません。」と言い切ったのではないのでしょうか。つまり、イエスにとって「時」とは、彼が栄光を受ける十字架上の死と復活だからであります。ですから、イエスは、母の心を父である神に向けて欲しかったのではないですか。しかも、若し、父なる神がお望みになるなら、まさに水を上等なぶどう酒に変えることがおできになることを、承知していたのでしょうか。

ところが、マリアは、イエスの拒絶にもかかわらず、早速、召使たちに命じます。「この人が何か言いつけたら、そのとおりにしてください」と。まさに、イエスが弟子たちを鍛錬するためにいつも強調していた方針にほかなりません。つまり、イエスのおことばに、忠実に聞き従うことこそが、弟子の生き方の基本なのであります。ですから、弟子たちをこの地上で最後に派遣するときに、イエスは次のように命じております。

「あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだ。あなたがたが出かけて行って実を結び、その実が残るようにと、また、わたしの名によって父に願うものは何でも与えられるようにと、わたしがあなたがたを任命したのである。」(同上 15.16-17)

ここで、ユダヤ人が清めに使う水瓶が用意されるのは、水を上等なぶどう酒に変えるというしるしによって、まさに新しいイエスの時代の到来を象徴していると言えましょう。ちなみに、預言者によれば、メシアの時代には多量なぶどう酒によって満たされることになっております。ですから、このしるしこそ、イエスが待ち望んでいたメシアに違いないという証しもなったのではないでしょう。

ところで、世話役が、そのぶどう酒を味見したとき、「どこから来たのか、分からなかった」のです。つまり、ヨハネ福音においては、イエスが「どこから来られる」のかが、いつも中心的な意味を持っているのであります。つまり、イエスは、ナザレにしるまた他のどこにしる具体的な場所からではなく、あくまでも上つまり神のもとから来られたお方にほかなりません。

しるしを見て信じる

とにかく、このカナで行われた最初のしるしによって、「弟子たちはイエスを信じた。」  
とうこと が肝心なのであります。

実は、パンの奇跡を行ったとき、群集が再びイエスのもとに集まってきたときです。イエスは、とっさに彼らの動機を見抜いて、次のように断言なさいました。

「あなたがたがわたしを捜しているのは、しるしを見たからではなく、パンを食べて満腹したからだ。朽ちる食べ物のためではなく、いつまでもなくならなで、永遠のちのちに  
至る食べ物のために働きなさい。これこそ、人の子があなたがたに与える食べ物である。」  
(同上 6.26b-27b)

実は、福音記者ヨハネは、何のために自分の福音書を書いたのかは、本文の中で、次のように念を押しています。

「これらのことが書かれたのは、あなたがたが、イエスは神の子メシアであると信じるためであり、また、信じてイエスの名によっていのちを受けるためである。」(同上 20.31)

ですから、イエスの生涯のクライマックスつまり、十字架上の死と復活のとき、弟子のヨハネは、ご遺体のない空の墓を「見て信じた」のであります。

また、羊飼いたちも、天使のお告げを信じ、飼葉桶に寝かされている赤ん坊のイエスをしるしと見て信じたのであります。(ルカ 2.12 参照)

最後に、このカナでの最初のしるしによって、まさに「神の栄光が現された。」と、ヨハネは、宣言していますが、それは、ヨハネ福音書の後半で語られる「栄光」を現す最初の「しるし」になったことを強調しているのであります。

ミサで歌う栄光の賛歌を、心を込めて歌うことが出来るよう共に祈りましょう。